小林秀雄著『本居宣長』：　二十八章主題《『古事記』と、阿禮『誦習（よみならひ）』〔とは、助辭（てにをは）を明確に現す『祝詞・宣命』（言靈）の語部を言ふ〕。その「關係論」的纏め》

①『古事記』（物：場　C‘）②稗田阿禮（物：場　C‘）③古語（物：場　C‘）④『誦習（よみならひ）』（物：場　C‘）⇒からの關係：「②の誦（よ）み習ふ③を、忠實に傳へる（D1の至大化）のが①の目的である」と言ふ次第で、「❺：⑦は、①を考へる上で、②の④を〔助辭（てにをは）を明確に現す『祝詞・宣命』であるが故に〕、非常に大切（D1の至大化）な事と見た」⇒「⑥：修史の仕事」（❺的概念F）⇒E：記録の内容を旨とする仕事なら、『日本書紀』の場合の様に、古記録の編纂で事は足りた筈。同時期に行はれた①といふ⑥では、その旨とするところが、内容よりも表現にあつた。その爲に、②の起用が、どうしても必要になつた。⑦曰く、②の仕事も『漢文の舊記に本づいた』のだが、『直（ただ）に書（ふみ）より書にかきうつしては、本の漢字のふり離れがた』いので、『語のふりを、此間（ここ）の古語にかへして、口に唱へこころみしめ賜へるものぞ』（『古事記傳』）と」（⑥への距離獲得：Eの至大化）⇒⑦宣長（△枠）：①②④への適應正常。

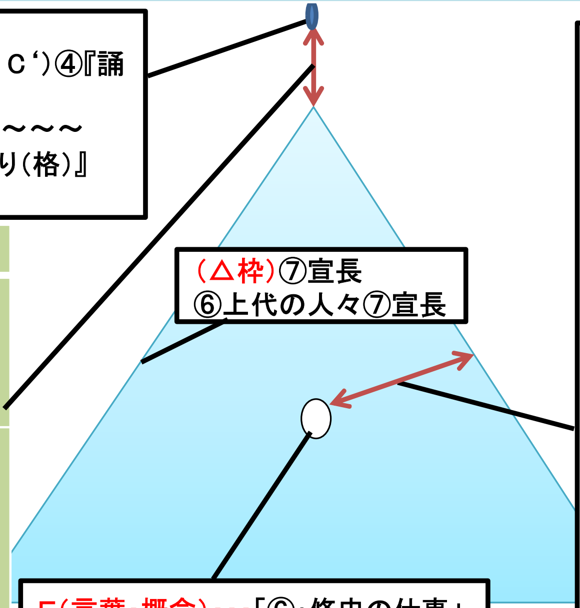
①助辭（てにをは）（物：場 C‘）②『いともあやしき言靈のさだまり（格）』（物：場 C‘）③祝詞、宣命（物：場 C‘）⇒からの關係：『萬葉』では、歌の句調にはばまれ、『記紀』では、漢文のふりに制せられて、現れ難（にく）かつた、①が、③には、はつきりと現れてゐる（D1の至大化）、といふ⑦の發見。その（③）の誦習（よみならひ）の語部（かたりべ）である、『阿禮』は、『有れ』であり、『御生（みあ）れ』、即ち神の出現の意味だ。名前からして、神懸りの巫女を指してゐる（參照『古事記傳』）。この（①の）②が、〔巫女：語部（かたりべ）〕から、文字を知らぬ⑥の口頭によつて、「❹：口頭によつてのみ、傳へられた事について」⇒「⑤：關心」（❹的概念F）⇒E：⑦の⑤はまことに深い（Eの至大化）ものがあつた。①には、係り結びに關する法則的な『ととのへ』、或は『格（さだまり）』と言ふべきものがある。⑦は、これ〔法則的な『ととのへ』『格（さだまり）』（Eの至大化）〕を、②と呼んだ。國語に、この獨特の基本構造（即ち①②）があればこそ、國語（『言靈』？）はこれ（①②）に乘じて（即ち、轉義D1の至大化）、われわれの間を結び（即ち『言靈』の、轉義D1の至大化＝合體Eの至大化）、『いきほひ』（Eの至大化）を得、『はたらき』（Eの至大化）を得て生きる（即ち、合體Eの至大化）のである、⑦はさう考へてゐた。文字を知らぬ昔の人々が、唱へ言葉や語り言葉のうちに、どのやうな情操を、長い時をかけ、細心にはぐくんで來たか。さういふ事について、文字に馴れ切つて了つた、當時の教養人達は鈍感に無關心であつた、と（『古事記傳』）」⇒⑥上代の人々⑦宣長（△枠）：①②への適應正常。

（物：場 C‘）・・・
①『古事記』（物：場 C‘）②稗田阿禮（物：場 C‘）③古語（物：場 C‘）④『誦習（よみならひ）』（物：場 C‘）
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
①助辭（てにをは）（物：場 C‘）②『いともあやしき言靈のさだまり（格）』（物：場 C‘）③祝詞、宣命（物：場 C‘）

からの關係（D1の至大化）

「②の誦（よ）み習ふ③を、忠實に傳へる（D1の至大化）のが①の目的である」と言ふ次第で、「❺：⑦は、①を考へる上で、②の④を〔助辭（てにをは）を明確に現す『祝詞・宣命』であるが故に〕、非常に大切（D1の至大化）な事と見た」

『萬葉』では、歌の句調にはばまれ、『記紀』では、漢文のふりに制せられて、現れ難（にく）かつた、①が、③には、はつきりと現れてゐる（D1の至大化）、といふ⑦の發見。その（③）の誦習（よみならひ）の語部（かたりべ）である、『阿禮』は、『有れ』であり、『御生（みあ）れ』、即ち神の出現の意味だ。名前からして、神懸りの巫女を指してゐる（參照『古事記傳』）。この（①の）②が、〔巫女：語部（かたりべ）〕から、文字を知らぬ⑥の口頭によつて、「❹：口頭によつてのみ、傳へられた事について」



F（言葉・概念）・・・「⑥：修史の仕事」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「⑤：關心」（❹的概念F）

E：〔F（言葉・概念）との附き合ひ方・用法〕・・・「So called」「Fと（△枠）との距離獲得」（Eの至大化）。

＊「記録の内容を旨とする仕事なら、『日本書紀』の場合の様に、古記録の編纂で事は足りた筈。同時期に行はれた①といふ⑥では、その旨とするところが、内容よりも表現にあつた。その爲に、②の起用が、どうしても必要になつた。⑦曰く、②の仕事も『漢文の舊記に本づいた』のだが、『直（ただ）に書（ふみ）より書にかきうつしては、本の漢字のふり離れがた』いので、『語のふりを、此間（ここ）の古語にかへして、口に唱へこころみしめ賜へるものぞ』（『古事記傳』）と」（⑥への距離獲得：Eの至大化）。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
＊⑦の⑤はまことに深い（Eの至大化）ものがあつた。①には、係り結びに關する法則的な『ととのへ』、或は『格（さだまり）』と言ふべきものがある。⑦は、これ〔法則的な『ととのへ』『格（さだまり）』（Eの至大化）〕を、②と呼んだ。國語に、この獨特の基本構造（即ち①②）があればこそ、國語（『言靈』？）はこれ（①②）に乘じて（即ち、轉義D1の至大化）、われわれの間を結び（即ち『言靈』の、轉義D1の至大化＝合體Eの至大化）、『いきほひ』（Eの至大化）を得、『はたらき』（Eの至大化）を得て生きる（即ち、合體Eの至大化）のである、⑦はさう考へてゐた。文字を知らぬ昔の人々が、唱へ言葉や語り言葉のうちに、どのやうな情操を、長い時をかけ、細心にはぐくんで來たか。さういふ事について、文字に馴れ切つて了つた、當時の教養人達は鈍感に無關心であつた、と（『古事記傳』）」。